

天文学 陰陽師が残した足跡

平安時代に活躍した安倍晴明ら陰陽師についての展覧会が、国立歴史民俗博物館（千葉県）で開かれています。陰陽師は、中国の伝統的な天体観測と暦作りの技術を基礎に、貴族たちの求めに応じて占いしていました。彼らは、天文学をはじめとする日本の自然科学に、どんな足跡を残しているのでしょうか。

陰陽師は、朝廷の一部門である陰陽寮に所属し、吉凶占いで重宝されていました。中世以後も、世襲で暦作りの技が伝えられてきました。

西洋の近代科学と接するのは、江戸時代前期です。朝廷と幕府が協力し、新たな暦である「貞享暦」（1685年施行）を

作りしました。幕府側で中心になったのは、渋川春海で、数理に優れ、西洋伝来の望遠鏡や世界地図を使っていました。

展覧会の企画に携わった林淳・愛知学院大教授は「渋川春海は京都で、陰陽頭である土御門泰福とともに、神道や暦学を学んだり、天体観測をしたりしました。中国や西洋の天文学の成果を取り入れながら、日本独自の暦を作ろうとしたのです」と解説します。「改暦を成功させたことで、幕府には天文方という役職が設けられ、渋川春海が初代となりました。その後、江戸・浅草に天文台ができ、本格的な天文観測が実施され、西洋天文学を踏まえた寛政改暦が行われまし

フロンティア Frontier 界

天体観測や暦作りに使われた「渾天儀」。江戸時代のもの（国立歴史民俗博物館提供）



た」とも。

貞享暦以前に使われていたのは、中国で作られた「宣明暦」で、導入から823年もたっており、2日ほど日がずれていました。貞享暦は月の満ち欠けを1カ月とした「太陰太陽暦」の一つではありましたが、初の国産暦であり、日本の自然科

学の第一歩ともされます。

会場では、渋川春海が制作した世界図や天文図、それに天体の動きを測る「渾天儀」が展示され、当時の知識の先端を知ることができます。

新しい暦作りに協力した土御門家ですが、明治初期に太陽暦が導入され、陰陽師の仕事はなくなり、伝統も途絶えてしまいました。

現代人の目からみれば、吉凶占いは迷信にすぎません。天文の観測は、西洋のように、宇宙の仕組みに関心が高まることはなく、暦の制作だけにとどまっていたようにみえます。長い眠りからさめ、ようやく科学的な貢献をしかかったのに、あっという間に姿を消してしまったという印象も受けます。

小さな疑問 お寄せください

不思議だが人には聞けず調べようもない疑問に答えるコーナー「人には聞けない2.0」を毎月1回程度掲載しています。電話番号を明記し〒100 8505（住所不要）東京新聞・中日新聞科学班まで。ファクスは03(3595)6919。Eメールはkagaku@tokyo-np.co.jp

企画展示「陰陽師とは何者かーうらな、まじない、こよみをつくるー」は、12月10日まで、千葉県佐倉市内の同館（京成佐倉駅徒歩15分）で。入館料一般千円、高校生以下無料。月曜休館（祝日の場合は開館翌日休館）。（吉田薫）